



プロモーションビデオ撮影風景(2008年1月 市内某所)

身近な家庭用工作道具「のこぎり」にはもう一つの顔がある。弓で擦ったりバチでたたいたりすると、何とも形容しがたい不思議な音色を紡ぐ楽器となるのだ。この「のこぎり音楽」(ミュージックソウ)の演奏家・サキタハチメさん(36)は、アルバム制作やさまざまなアーティストとの競演などを通して「この世にない、天に響くような美しい音色」を追求し続けている。

チンドン屋からのこぎり音楽へ

パンクやロックバンドでギターを弾いていた大学時代、たまたまラジオから懐メロなど昔の日本の音楽が流れてきた。「すうっと胸に染みてきた。幼いころ、母親がずっと童謡を聴かせてくれていたからかな」。タイミングよく「ちんどん通信社」の団員募集のチラシを見つけ、伝統文化を伝承する世界に飛び込んだ。

のこぎり音楽と出会ったのは、ちんどん太鼓やテナーパンジョーを弾きながら地域のイベントなどを回っていたときだ。「大道芸祭りで都家歌六師匠の『のこぎり漫談』の舞台を初めて見て、感動した。でも落語家に弟子入りさせてくださいとは言えないし、見よう見まねで独学し始めた」

もちろん教本もなく、情報も限られている。「横山ホットブラザーズさんがテレビで『S字に曲げんねん』と言うのを聞いてコツを知ったり、師匠に脚の震わせ方を教えてもらったり」。なんとか演奏できるようになった1年後、人前で披露しようとしたが全く鳴らず、苦いスタートを切った。

数少ないプロの奏者に

それでもめげることなく研鑽を積み、1997年には初めて出場した「のこぎり音楽世界大会」(アメリカ)で優勝。メキメキと力をつけ、ソロのほかアコースティック・デュオ「はじめにきよし」などさまざまなスタイルで、世界的にも珍しいプロの演奏家として活躍の幅を広げていく。

2006年にはソリストとして大阪フィルハーモニー交響楽団と共演。オリジナル曲「光のさす方へ」とバッハ「2つのバイオリンのための協奏曲」を演奏した。「めっちゃ感激した。当たり前のように音楽を高めてきた人たちと共演できて勉強になった」。最も印象に残る大舞台となった。

ステージやレッスンなどを通じ、楽器の知名度も徐々に高まっていった。しかし、まだまだ楽器の物珍しさが先立ち、演奏自体にじっくりと耳を傾けてもらえないことも多い。「音を鳴らすだけで『おー!』と歓声上がる。でもそれだけではつまらない。“音楽”として高めていきたい」

可能性は無限大

ずっと見守ってくれている歌六師匠には昨年、「のこぎり音楽の一番になれ」「唯一の弟子」という思いのこもった「都家歌いち」という芸名をもらった。「大変光栄なこと。いろんな演奏家を見てきたが、やっぱり歌六師匠の音色は世界一の音量とソウル(魂)がある。本当にすごい」。今もなお、偉大なる師匠である。

今年は秋に念願のヨーロッパツアーも計画する。「クラシックを当たり前のように聴いている人たちがどう反応してくれるか、めっちゃ楽しみ」と胸を躍らせる。いつの日か、カーネギーホールなどクラシックの殿堂や、のこぎりだからこそ可能な海中での演奏も夢見る。

計り知れない可能性を秘めた、のこぎり。「のこぎりにできないことはないんちゃうかな。肉も切れるし、お好み焼ぐらい焼けるし(笑)。演奏スタイルもさまざま。興味を持った人が自分の好きなように自由に演奏したらいい」。自力で開拓する楽しさこそ、のこぎり音楽の最大の魅力なのかもしれない。

(文・江中咲紀/表紙写真・高島悠介)

CLOSE
クローズアップ
UP

のこぎりで、 新たな音楽世界を創造

プロフィール

ミュージックソウの演奏家

サキタハチメさん



堺市生まれ。1991年から独学でのこぎり演奏を習得。97年と2004年の「ミュージカルソウ・フェスティバル」で優勝。05年に大阪市「咲くやこの花賞」(大衆芸能部門)受賞。06年、ソリストとして大阪フィルハーモニー交響楽団と共演。同年12月、オリジナルアルバム『MUSICAL SAW SONGS * S』リリース。NHK教育番組『シャキーン!』やテレビCM、映画などの音楽担当。今秋公開の映画『パコと魔法の絵本』にのこぎり弾きの役で出演。9月には東京のロイヤルチェンバーオーケストラと共演、自作曲で挑む。毎日文化センター(大阪市北区)とラプリーホール(河内長野市)でのこぎり音楽教室を開講している。日本のこぎり音楽協会関西支部長。
ホームページ <http://www.musicalsaw.net/>